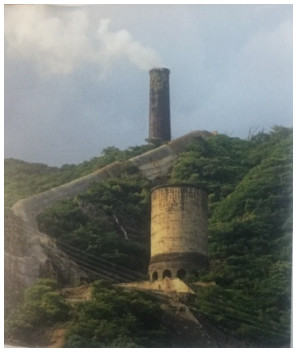
日立鉱山大煙突

18 日に「ある町の高い煙突」をレポートしたあと、この高い煙突を見たくなった。図書館で探していたら、日経プレミアシリーズ『日本の近代遺産』2009 年に写真が掲載されていた。残念なことに、日立鉱山大煙突は今から 25 年前に倒壊していた。写真上は倒壊前の大煙突。写真下は「倒壊後、3 分の 1 の高さに修復され、いまはリサイクル工場の水蒸気を排出している。手前はダルマ煙突」。大煙突について次のように書かれていた。



「工都のシンボル、ポキリ」「突然の出来事に嘆く市民」―。1993（平成 5)年 2 月 19 日、日立鉱山の大煙突が突然、下部 3 分の 1 を残して倒壊したことを報じた新聞の見出しだ。市内のどこからでも望めた大煙突は日立という工業都市にあって企業と地域との共存共栄のシンボルであった。市民は 78 歳と 2 カ月の寿命を惜しんだ。

小坂鉱山（秋田県）の再建に成功した久原房之助が、経営不振で苦しんでいた茨城県の赤沢銅山を 1905(明治 38)年に買収、屈指の銅鉱山・製錬所に育て上げたのが日立鉱山である。最新式の炭鉱、削岩技術、製錬法の採用などで創業 10 年足らずで有力鉱山会社に成長した。10(明治 43)年には初代工作課長の小平浪平（日立製作所創業者）の進言で日立製作所の起源となる電気機械製作所の工場も造られた。

しかし、銅製錬で発生する亜硫酸ガスが地元で大きな問題になった。豆やタバコは煙に弱く、周辺住民との共生を重視していた同社は損害賠償に応じていたものの事態は改善しなかった。

煙突はできるだけ低くして、途中で空気と混ぜて薄めてから排出するというのが、このころの煙害対策の主流だった。日立鉱山も製錬所の創業開始時に造った煉瓦造りの八角煙突（高さ 18 ㍍）に加えて、西側の神峯山の尾根伝いに全長 1.6 ㌔もの煙道（百足煙道）を設置した。煙道の途中に開けた穴から煙を流す仕組みだ。政府の命令で高さ 36 ㍍、内径 18 ㍍のずんぐりしたダルマ煙突を建てたりしたが、一向に効果をあげることができなかった。ダルマ煙突はかえって煙害を増大させたので「阿呆煙害」と呼ばれた。

そこで久原は「思い切って高い煙突を造り、上空で拡散させたら」と発想を転換。陸軍に人を派遣して係留気球の勉強をさせ、どのくらいの高さなら煙が上昇気流に乗って拡散するかを調べた。建設費は 30 万円という巨額に上る。大煙突の効果は期待できないという反対論も社内で出た。しかし、久原は「この大煙突は日本の鉱業発達のための一試験台として建設するのだ」と譲らず、1914(大正 3)年建設に着手する。

大雄院という寺の跡に作った製錬施設の裏手の山の斜面、海抜 325 ㍍の地点。鉄筋コンクリート製で高さは 500 尺、155.7 ㍍あった。当時、米国モンタナ州の製錬所の煉瓦煙突 152 ㍍をしのぎ世界一である。

コンクリートミキサー車などなかった時代。3 万本にもなる丸太と 5 万 4 千把の棕櫚縄で作った足場で延べ 3 万 6 千人の人力を動員してコンクリートをこね、注入していく大掛かりな作業だった。

それでも工事は異例の速さで進み、着工後わずか 9 カ月足らずで完成、翌 1915(大正 4)年の 3 月から稼働した。同時に製錬所の周囲 10 ㌔に設置した観測所で気象をチェック、風向きなどで煙害が悪化しそうになると操業を大幅に抑えるなど煙害防止に努め効果を上げた。‥‥

日立鉱山は 1981(昭和 56)年に閉山した。大煙突建設のころ、製錬所の周囲は禿山だったが、今は緑に覆われている。1 千万本もの植林事業が実を結んだ。大島桜とヤシャブシを中心にした木々が低くなった「大煙突」を取り囲んでいる。

(2018 年 8 月 25 日)